

書の面白いところ教えてください！

Artist

齋藤 太一 SAITO Taichi

筑波大学芸術専門学群
美術専攻 2年

Writer

三石 友貴 MITSUISHI Yuki

筑波大学芸術専門学群
芸術学専攻芸術支援コース 3年

これが上手いの？

今まで書の展覧会に行ってみても、作品の「良い・悪い」「上手い・下手」が私には分からなかった。この作品が賞をとっているから、良い作品なのだろうなという程度にしか書の作品を見られないのは歯がゆい。そうではなく、今までより書をもっと深く知りたい。深く見たい。この気持ちをもって、書の世界に一歩足を踏み入れてみた。

書を学ぶ学生

日本人なら誰もが嗅いだことがあり、懐かしさを覚える人も多いかもしれないツンとした墨汁の匂い。この香りが鼻をつく廊下からひとつの教室を覗く。床一面に、書道用の、フェルトのような柔らかい下敷きを引いた教室で一人黙々と作業している人物がいる。彼の名前は齋藤太一さん。筑波大学芸術専門学群美術専攻で書を学ぶ2年生である。くせつ毛とストレートが混ざったような髪の毛が屋根のように額を縁取り、その間からスタイリッシュな太い黒緑の眼鏡がのぞく。書の学生だからというわけではないだろうが、黒い服を着ていることが多い気がする。今時の学生は、書を学んでいると言っても、「えっ！？本当に書を学んでいるの？」と思うような、派手で華やかな雰囲気のある学生も多いように思うが、齋藤さんはどちらかというと、書を勉強しているような雰囲気のある学生かもしれない。このどこか他に流されない一本道を歩いていそうでいながら、親しみやすさも感じさせる青年に、書の世界の案内人をお願いした。

習字から書へ

齋藤さんは小学校1年生の時、習字を始めたことが書の世界への第一歩だった。習字を始めたきっかけは両親の勧めという、いたって普通なものだった。そのままやめる理由もないし…と、続けて9年間。転機は高校1年生の時訪れた。それまで通っていた書塾がたたまれるということで、新しい先生に師事することになった。その先生が日本書作院の吉澤鐵之（よしざわてつし）先生だった。

それまでは何となく消極的態度で続けていた習字であったが、鐵之先生の作品を間近で見て、先生の書く姿、書きぶりを見て、「自分もこういう字を書きたい」と書に対して初めて情熱が湧き、積極的態度に一変した。そこからより深く書の勉強をしたいと現在の進路も決定した。「とにかく先生の書く字はすごい」と齋藤さんは語る。何がすごいのかと尋ねると、「うーん、やっぱり作品がすごいんですよね」と言う。そう言われても分からない私に、「ちょっと見てみますか」と、先生の作品が掲載されている書の雑誌を持ってきてくれた。鐵之先生が所属する日本書作院という団体は、「行草書」を専門とする書道団体。行草書というのは、簡単に言えば、早書きするためにくずした書体である。その時見た作品は、自詠の漢詩がもちろん行草書体で書かれているものだった。文字は何となく読めるものもあるが、書かれている内容は私には読み取れない。ちなみに、書とは本来文字の形体や構成の美しさだけでなく、書かれ

ている内容も一緒に見て味わうものだと思う。現代の書は形体や構成に比重が傾いているが、齋藤さんはそういったところにもこだわりをもっており、自ら漢詩を詠む鐵之先生を尊敬しているようだ。

雑誌に掲載された鐵之先生の作品を一目見た私の感想は、「余白が多くてきれい」「印刷だけど、墨の色がきれいに見える」。すごい先生の字と言われれば、確かに線に緩急があり、凛とした美しい書に見える。しかし、ではどこがどういいのかと言われると分からない。おそらく筑波大学の書コースの学生の書とどっちがいい書かと聞かれても私には分からないだろう。「とにかくカッコいい」と力を込めて言う齋藤さんに、先生の書のどこにそれほど惚れ込んでいるのか、言葉にするのは難しいそうだが、そこを突っ込んで聞いてみた。

「書きぶり…って分かりますかね。書きぶりは書きぶりなんですけど、字に勢いを感じますよね。勢いがあるんですけど、構図が緻密に計算されていて洗練されている。例えば、作品全体でこの字が一番見せ場の字だから、大きく力強い書きぶりで、その周りの字は小さく、力を抜いて書いている。一文字だけ見ても、ここはすごく力が入っているけど、この辺は緩かったり、かすれを入れている。また先生は古典もよく書かれているので、伝統的な古典の味わいもありますね」

書きぶりとは、書く姿も含めた字の書き様のことだが、その書きぶりから何かが伝わってくる作品が「上手い」作品だと言う。齋藤さんに解説をしてもらおうと、なるほどと確かに思う。しかし、自分で書作品を見て、そこまで見抜けるだろうか。書の「いい」「わるい」を見極められるようになるには、沢山の色々な作品を見て、目を肥やすことが不可欠という。一朝一夕に身につくような、「書はこう見ればいい」という見方はないのだろう。

齋藤さんの書

では、書はやはり勉強した人にしか分からない、楽しめないような世界なのだろうか。そうではないだろう。字を書くことは私達の誰もがする日常的で、私達の生活に深く根付いたものだ。「書について知らない人にも書を楽しんでほしい」。そういう想いをもって、10月に行われた筑波大学の学園祭「雙峰祭」での展示には作品を出展したという。題は「臨三体石経残石春秋経（りんさんたいせきけいざんせきしゅんじゅうきょう）」。「書で昔の作品を手本とし、そのまま真似て書いた作品を臨書といい、最初の「臨」は臨書の臨。「三体石経残石」というのは、まず儒教の経典が刻まれた石碑を「石経」と言う。「残石」というのは、その石碑の現在まで残っている部分。これは中国の三国時代～魏の時代に制作されたものなので、現在は失われている部分もある。そして「三体」というのは、この石碑に刻まれたテキストは、一文字がそれぞれ古文（こぶん）・小篆（しょうてん）・隸書（れいしょ）という三種の書体で書かれているため三体という。「春秋経」というのは、儒教のテキストである孔子の五経のひとつである。つまり、この作品は、孔子の春秋経が三種類の文字で刻まれた石碑の文字を手本として書いたものですよ、ということだ。これを齋藤さんは、折帖（おりじょう）という昔の本の形にして仕上げた。

言うまでもなく、三つの書体で書かれていることが最も特徴的な作品だが、この題材を選んだところに、齋藤さんの「誰にも書を楽しんでほしい」という想いが込められている。異なった三つの書体で書かれているため、見るだけで面白いのだ。書の知識どころか、字を読めないような子どもでも視覚的に楽しめる。簡単に説明すると、古文は春秋戦国時代に魯国・斉国で主に使用されていて、絵のような象形文字に近い。隸書は漢から三国時代に正式書体として使われており、ほとんど現在の楷書に近い。小篆は秦の始皇帝が中国統一とともに制定した書体。いずれも、じっくり見ればみるほど面白い。文字が人の顔のように見えたりと、

イメージーションが膨らんでいく。齋藤さんと作品を見ながら、筆の穂先を中に入れる「逆筆藏鋒（ぎやくひつぞうほう）」や逆に穂先をあらわにする「露鋒（ろほう）」といった、使われている技法なども教えてもらいながらしばし作品を眺めた。

最後に、書をやっていて良かったと思う時はどんな時かと聞くと、「実用的に書が役だった時。ちょっと看板を書いてと言われて書いたらとても喜んでもらったり。あと、年賀状は便利ですね」と笑った。難解に思えた書も案外身近なところにあるようだ。奥深い書の世界に少し興味をもってもらえたら幸いである。



齋藤太一《臨三体石経残石春秋経》
上から古文・小篆・隸書



齋藤太一《臨三体石経残石春秋経》



書室の様子